

谷文晁筆「対嶽楼宴集当日真景図」(広島県立歴史博物館蔵)の史的位置

一 雅集図・送別図の伝統に照らして

中村真菜美(石川県立歴史博物館) / 藤原幹大(三井記念美術館)

文化元年(1804)、福山藩儒・菅茶山(1748-1827)は、人生初の江戸出府を遂げた。この江戸滞在は、茶山にとって旧交を温めるとともに、江戸の名士たちと新たな関係を深める絶好の機会となった。とりわけ同年7月18日、柴野栗山(1736-1807)の園邸・対嶽楼で催された茶山留別の宴集は、最たる出来事と言える。

本発表では、この宴の参集者9名が茶山に贈った詩画を収める「栗山堂餞筵詩画卷」(広島県立歴史博物館蔵)の内、谷文晁(1763-1841)が描く「対嶽楼宴集当日真景図」を中心的に取り上げる。本作については、参集者の伝記研究の文脈から論及されることが多く、表現内容に踏み込んだ考察は少ない。

まずは「対嶽楼宴集当日真景図」を観察し、制作意図を検討する。本図は富士山を望む高台に集った10人が、各々詩画を作り、酒や馳走を楽しむ様子を描く。各人の容貌・姿態は細かく描き分けられ、参集者の誰にあたるかは、金杉英五郎著『凡品雑録』(大正8年刊)掲載の本図の草稿から推定できる。各人物に関する伝記情報を踏まれば、文晁が対象となる人物の身体的特徴や趣味嗜好が伝わるように、作画を試みたことが明らかになる。一方で、画中人物は中国文人風の深衣を身に着けているが、現実には即すかは疑問である。この宴に遡る享和2年(1802)、対嶽楼で催された栗山主催の赤壁会において、文晁の息子・谷文一(1787-1818)が同趣向の宴集図を制作し、和装の参加者を唐風に改め、風流を演出したことが伝わる(『蒙斎文集』)。このことから、深衣は宴集の理想化、参集者の価値観の表出を目的とした演出だと想定される。こうした記録性を重視しつつも、モチーフや構図を以て特定の意味を込める風景・人物表現のあり方は、文晁が培ってきたものと評価できる。

次に、「対嶽楼宴集当日真景図」を文人雅集図の伝統に位置づける。日本において現実の集いを集団肖像画として絵画化する行為は18世紀半ば、特に大坂の詩社・混沌社周辺で盛んに行われた。例えば、近年紹介された葛蛇玉筆「蘿園雅集図」(明和5年(1768)頃、個人蔵)は参集者を中国文人風の姿に改めて描く点などに、本作に対する先行性が認められる。本作の関係者の多くは混沌社のメンバーと交友関係にあり、影響を受けている可能性が高い。

最後に本作が送別画である点に着目し、餞宴を題材とする他例を整理した上で、その機能を考察する。文化3年、茶山は伊沢蘭軒(1777-1829)に本作を披露した(『長崎紀行』)。また本作の写しが栗山の後援者であった讃岐の医師・久保桑閑(1709-1782)の子孫宅に伝わることは注目される。茶山と親しかった頼春水(1746-1816)や中井竹山(1730-1804)らも、送別の詩画を他者に展覧したり、死後に閲覧されることを見越して文章を残したりしており、雅集の典範たる「西園雅集図記」で言う「後之攬者」への視座、後世に顕彰の対象となることへの自覚が根底にあると考えられる。